

自由大学運動の歴史的意義とその限界

長島, 伸一 / NAGASHIMA, Shinichi

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The Hosei University Economic Review / 経済志林

(巻 / Volume)

74

(号 / Number)

1・2

(開始ページ / Start Page)

169

(終了ページ / End Page)

201

(発行年 / Year)

2006-08-28

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00001945>

自由大学運動の歴史的意義とその限界

長 島 伸 一

はじめに

自由大学運動とは、1920年代のはじめから30年代のはじめにかけて、長野県の上田市、飯田市、松本市、また新潟県、福島県、群馬県など長野県周辺の各地で展開された民衆の自己教育運動のことである。最初の講義は、1921（大正10）年11月に長野県上田市で行われ、現在確認されている最終の講義は、1930（昭和5）年1月に同じく上田市で開講されている。この運動の最盛期には各地の教育運動を繋ぐ「自由大学協会」が設立され、翌1925（大正14）年には月刊で『自由大学雑誌』も発行された。

ところで、この自由大学運動の研究史には長く深い蓄積がある。とりわけ自由大学研究会が設立され『自由大学研究』¹⁾が上梓されていた1970年代前半から1980年代中葉にかけては、小川利夫²⁾、大槻宏樹³⁾、山野晴雄⁴⁾、米山光儀⁵⁾、柳沢昌一⁶⁾など、教育学や歴史学の研究者による重要な研究論文ばかりでなく、研究の前提となる史・資料類も数多く公開され⁷⁾、研究の裾野が一気に広がった時期でもあった。

自由大学運動研究史を振り返ると、たしかに、上記の十数年間は、研究史上の興隆期であったと見て間違いのない。この間の史資料の発掘とそれに基づく研究の進展とは、まさに目を見張るものがあったと言えるからである。しかし、そこに至る前史もまた無視することはできない。特に、その前史における杏村研究者・上木敏郎が果たした役割を軽視することは許さ

れないであろう。上木の発行していた個人雑誌『土田杏村とその時代』⁸⁾と連続論文「若き日の土田杏村」⁹⁾と『教育労働研究』創刊号に掲載された「〔文献〕 解題」¹⁰⁾とは、いずれも、現在に至るもなお逸することのできない〈前史を彩る重要文献〉であった。

他方、80年代後半以降は、興隆期に比べると華やかさは欠けるが、むしろ地道な研究が蓄積されてきており、それらを無視ないし軽視することも許されない。とりわけ大槻宏樹の編集した『金井正選集』、これは興隆期の末期に出版されたものだが、その姉妹（兄弟）編とも言うべき『山越脩蔵選集』が比較的最近上梓された¹¹⁾ことは、今後、自由大学研究から見た研究の幅を確実に拡充することになる、と断言して間違いのないであろう。また同時に、例えば、山口和宏¹²⁾や渡邊典子¹³⁾らポスト『自由大学研究』世代による研究論文が著され、自由大学研究に新たな光が当てられてきている。本稿は、これらの研究動向のすべてを視野に入れた研究ではないが、可能な限り過去40年以上にわたる自由大学研究の蓄積を踏まえ¹⁴⁾、併せて比較的最近の動向にも留意しながら、従来の研究で軽視されがちであった論点に、僅かながら新たな光を当てようとする試みである。

- 1) 1973年6月に創刊号が発刊された『自由大学研究』は、1986年1月の第9号まで発行されたが、その間に別冊2冊（『伊那自由大学の記録』〔79年10月〕および『自由大学運動60周年記念誌』〔81年11月〕）と『自由大学運動と現代』（自由大学運動60周年集会報告集、83年10月）も併せて出版されている。また、79年3月から『自由大学研究通信』も発行された。
- 2) 『『自由大学』運動の再評価——その現代的視点(1)(2)』『自由大学研究』第1、2号、1973年6月、1974年9月。「自由大学運動」国立教育研究所編『日本近代教育百年史』第7巻、1974年（『青年期教育の思想と構造』勁草書房、1978年に再録）。「青年団の官製化と『自主化』運動」（前掲『日本近代教育百年史』第7巻、所収）。「現代社会教育思想の生成——日本社会教育思想史序説」『現代社会教育の理論』（講座 現代社会教育Ⅰ）亜紀書房、1977年。「対談：青年と自己形成——『農民哀史』の著者〔渋谷定輔〕と語る」『教育』1979年6月。「座談会・国民教育の可能性をめぐって」『歴史公論』第83号、1982年10月。「生涯学習としての社会教育——草稿・

- 三題】『小川利夫社会教育論集』第1巻，亜紀書房，1997年。
- 3) 「自由大学運動における社会教育論」『学術研究』〔早稲田大学〕第19号，1972年12月。「自由大学についての二・三の問題」『自由大学研究』第5号，1978年5月。「戦前自己教育論の思想構造」同編『自己教育論の系譜と構造——近代日本社会教育史』早稲田大学出版部，1981年。「自由大学運動——自己と他者の関係性」『歴史公論』第83号，1982年10月。同編『社会教育史と主体形成』1982年。
- 4) 代表的な論文に以下がある。「上田自由大学運動研究ノート」『民衆史研究』第10号，1972年5月。「昭和初期の上田自由大学」『自由大学研究』第1号，1973年6月（「昭和恐慌と自由大学運動——上田自由大学を中心に」と改題・加筆して『長野県近代史研究』第6号，1975年に再録）。「解説 伊那自由大学の成立と経過」同編『自由大学運動史料 伊那自由大学関係書簡（横田家所蔵）』自由大学研究会，1973年9月。「自由大学運動と国民の学習権」『民衆史研究会会報』第2号，1974年5月。「自由大学研究の現段階と課題」『自由大学研究』第2号，1974年9月。「新潟県における自由大学運動(1)(2)」『自由大学研究』第3，4号，1975年10月，76年9月。「大正デモクラシーと民衆の自己教育運動——上田自由大学を中心として」『季刊 現代史』第8号，1976年12月。「信濃自由大学の成立と展開」『日本歴史』第347号，1977年4月。「魚沼自由大学の性格——佐藤泰治氏の批判に答えて」『魚沼自由大学関係資料』『自由大学研究』第6号，1979年10月。「伊那自由大学の性格をめぐって」『自由大学研究』別冊1，1979年10月。「自由大学運動の生成とその展開」碓井正久編『日本社会教育発達史』（講座 現代社会教育II）亜紀書房，1980年（『自由大学運動60周年記念誌』1981年11月に再録）。「戦時下知識人の思想と行動——タカクラ・テルの場合」『法学新報』（中央大学法学会）第109巻第1・2合併号，2002年4月。
- 5) 「上田自由大学の理念と現実——タカクラ・テルの教育的営為」『社会学研究科紀要』〔慶応義塾大学大学院〕第21号，1981年。「タカクラ・テルの半生——大衆から学んだ知識人」山手英学院『紀要』第12号，1982年10月。「土田杏村の生涯教育論構想」『日本生涯教育学会年報』第3号，1982年11月。「自由大学の発展的継承とは何か——上田自由大学を素材として」『自由大学研究』第8号，自由大学研究会，1983年10月。「伊那自由大学とタカクラ・テル」『慶応義塾大学教職課程センター年報』第1号，1986年。「自由大学の影響に関する一考察——長野県下伊那郡大下条村の場合」『慶応大学教職課程センター年報』第2号，1987年。
- 6) 「信濃自由大学成立過程の再検討」『社会教育の研究』〔早稲田大学教育学

部社会教育専修大槻宏樹ゼミ報告書〕第8号, 1980年。「民衆の自己教育運動における知識人と民衆の関連性」『日本教育史研究』第3号, 1984年5月。『『自由大学の理念』の形成とその意義』『東京大学教育学部紀要』第23巻, 1984年3月。「自由大学運動における自己教育思想の形成過程」社会教育基礎理論研究会編『叢書 生涯学習——自己教育の思想史』雄松堂, 1987年。

- 7) 山野晴雄「自由大学関係資料目録」『自由大学運動60周年記念誌』（『自由大学研究』別冊2）参照。中でも受講者の日記や講義ノート、関係者の書簡や回想録が重要であるが、ここでは以下の2冊の史料を挙げておく。山野晴雄編『自由大学運動史料 伊那自由大学関係書簡（横田家所蔵）』自由大学研究会, 1973年9月。小出町教育委員会編『小出町歴史資料集』第1集（近代教育編II）, 1981年3月。
- 8) この個人雑誌は1966年2月から1972年4月まで全16号が刊行された。「山村暮鳥に宛てた土田杏村の書翰」（第5号, 1966年12月）, 「土田杏村に宛てた山本宣治の書翰」（第7・8合併号, 1968年3月）, 「本多謙三に宛てた杏村の書簡」（第14・15合併号, 1971年4月）などの史料のほか, 第7・8合併号は自由大学運動の特集号にあてられている。なお, 17年間の中断の後, 1989年4月に復刊第1号（通巻第17号）が発行され, 1991年に合冊版『土田杏村とその時代——上木敏郎編著』が新潟県佐渡郡新穂村教育委員会より刊行された。
- 9) 『成蹊論叢』の第6号（pp.36-123）, 7号（pp.4-130）, 8号（pp.63-137）, 10号（pp.52-99）〔1967年4月～1971年12月〕に掲載された膨大な連続論文で, 随所に当時は未発表ないし入手困難な史料類を埋め込みながら執筆された論稿である。
- 10) 「土田杏村と自由大学運動 資料・自己教育の源流 I」村田栄一編集『教育労働研究』第1号, 1973年4月。『農村問題の社会学的基礎』（改版, 第一書房, 1932年）に所収されている「農村争議と将来の農村学校」「義務教育年限延長反対論」および自由大学運動と関わる「信濃自由大学趣意書」「自由大学に就いて」「信南自由大学趣旨書」「自由大学とは何か」「魚沼, 八海自由大学へ」「自由大学へ」「夏期大学と自由大学」「巡回美術展覧会の計画」を転載し解題を付したもの。
- 11) 『金井正選集——大正デモクラシー・ファシズム・戦後民主主義の証言』早稲田大学教育学部大槻研究室（大槻ゼミ報告書「社会教育の研究」特別号）, 1983年。『山越脩蔵選集——共生・経世・文化の世界』前野書店, 2002年。

- 12) 「土田杏村における『教養』の問題——その思想的根底としての華嚴の世界観について」『日本の教育史学』〔教育史学会紀要〕第36集, 1993年10月。「自由大学運動における『教養主義』再考」『日本社会教育学会紀要』30号, 1994年6月。「『非近代的教育方法』再考」『立命館教育科学研究』第7号, 1996年3月。「土田杏村のユートピア」上杉孝實ほか『社会教育の近代』松頼社, 1996年。「土田杏村の人間観に関する一考察」『教育論叢』〔近畿大学〕第9巻第2号, 1998年1月。「土田杏村における『華嚴の世界観』の成立」『教育論叢』第11巻第1号, 1999年9月。「土田杏村における『社会』と『国家』(1)~(4)」『教育論叢』第13巻第1号~第14巻第2号, 2001年3月~2003年。「土田杏村の近代——文化主義の見果てぬ夢』ペリカン社, 2004年。
- 13) 「(聞き取り) 長野県小県郡神川村における学習集団『路の会』について」『中等教育史研究』〔中等教育史研究会〕第1号, 1993年5月。「(研究ノート) 昭和恐慌期における青年層の学習活動——長野県小県郡神川村を事例として」『日本生涯教育学会年報』第14号, 1993年11月。「ファシズム体制移行期における青年団運動——長野県小県郡を事例として」『人間研究』第30号, 1994年3月。「(聞き取り) 長野県小県郡神川村の青年団活動——望月与十氏に聴く」『中等教育史研究』〔中等教育史研究会〕第2号, 1994年5月。「1920~30年代における青年の地域活動——長野県神川村『路の会』による学習・教育を中心に」『日本教育史研究』第13号, 1994年8月。
- 14) 必ずしも充分なものではないが, 長島伸一(編)「自由大学関係文献目録」(長野大学編『上田自由大学とその周辺』郷土出版社, 2006年)を参照。

三つの運動と三人の創設者

何事にも前史があるように, 1921(大正10)年11月に開講された信濃自由大学(のち上田自由大学)に先立って, 上小地域(上田・小県地域)にはさまざまな文化的ないし政治的な運動が存在していた。『回想・枯れた二枝』(1967年)の著者, 猪坂直一(1897-1986年)は, 回想記出版の翌年に上木敏郎の個人雑誌『土田杏村とその時代』に「自由大学のイメージ」と題するエッセイを寄せ, 当時の状況を次のように記している。

「自由大学はそういう〔大正デモクラシー期の〕世情の中に生まれた。しかし, 自由大学に先だって小県哲学会が生まれ, 自由画と農民美術の運

動が山本鼎氏を中心におこり、青年団は上田地方も官製ではあったが、その講演会には河合栄治郎、蠟山政道、那須浩の諸氏が招かれていた。また吉野作造氏らの黎明会の名をとって生まれた信濃黎明会は普選運動にかけまわり、馬場恒吾、中野正剛、永井柳太郎、鈴木文治、尾崎罌童、島田三郎らの講演で聴衆を集めていた。

このような青年たちの活動の中で、自由大学は甚だ地味な存在であった。知識に飢え学問を愛する者が、腰を落ちつけて勉強しようというのだから、何か実世間から遠ざかり、青年運動から逃避したようにさえみられた。……

幸いなことに、自由大学は聴講者自らによって経営することができた。大正10年から15年までつづけられ、その後も間欠的ではあったが数年つづけられた。今から思えばよく聴講者が得られたもので、当時の一講座（一週間を標準）三円乃至四円という会費は、だいたい繭一貫目の代金に当たっていた。……

それだけ学問の価値が高かったのである。大学教育というものに地方青年が飢えあこがれていたのである。

もっともその自由大学の経営もだんだん苦しくなっていた。それにはさまざまな原因があるけれども、学問の欲求が低下したことは明らかである。ヘーゲルやマルクスを基本から勉強する青年が減じ、パンフレット一冊で革命を口にする者がふえてきたのである。昭和2年の金融恐慌、ついで蚕糸業の不況というきびしい世情がそこにあった¹⁾。

見られるように猪坂は、自由大学に先行する文化運動ないし政治運動として、小県哲学会、児童自由画・農民美術運動、そして〔官製の青年団に飽き足らない青年たちが起こした〕信濃黎明会の普選運動²⁾という三つの運動を挙げている。しかし、猪坂の回想記『枯れた二枝』のサブ・タイトルが「信濃黎明会と上田自由大学」と題されていることから推測されるように、猪坂自身は小県哲学会にも、児童自由画・農民美術運動にも関わっていない。それらと関わりをもったのは、上田市に隣接する神川村（現

在は上田市) 在住の金井正 (1886-1955年) と山越脩蔵 (1894-1990年) という二人の農村青年であった³⁾。

二つの運動のうち金井が精魂を込めたのは、児童自由画運動と農民美術運動であった。提唱者は山本鼎⁴⁾であり、山本をこれらの文化運動へいざなったもの、それはフランス留学からの帰路立ち寄ったロシア革命前夜のモスクワでの展覧会だった。しかし、金井の物心両面からの協力なしに、二つの運動を語ることはできない。「農民美術、PEASANT ARTは何れの國にもあるが、是れを現に、組織的に國家の産業として奨励して居るのは露西亞である」に始まる「農民美術建業之趣意書」⁵⁾は、山本鼎との連名で公表されているし、じじつ金井は二つの運動に惜しげもなく私財を投じた。その額たるや「家が五百円位で建立出来た当時の金額で二万円」⁶⁾にも達したといわれている。

もちろん、山越の協力も無視できない。しかし、信濃黎明会も含め三つの運動に関わった山越が最も力を注いだのは、小県哲学会と後に呼ばれることになる哲学講習会であった。そして、この講習会こそは、やがて自由大学に発展的に解消されることになる、自由大学の生みの親だったのである。

- 1) 猪坂直一「自由大学のイメージ」上木敏郎編『土田杏村とその時代』第7・8合併号、23ページ。合冊版、202ページ。
- 2) 詳しくは青木孝寿「信濃黎明会から信濃自由大学への道」『信濃路』第11号、1974年10月および山野晴雄「大正デモクラシー期における青年党類似団体の動向」『自由大学研究』第9号、1986年1月を参照。
- 3) 金井自身の論稿については、前掲『金井正選集』を参照。また金井の人と思想に関する論稿として、小崎軍司「農民哲学者・金井正」『思想の科学』第39号 (別冊 No.9)、1974年11月、および柳沢昌一「自由大学運動と〈自己教育〉の思想」大槻宏樹編『自己教育論の系譜と構造——近代日本社会教育史』早稲田大学出版部、1981年がある。また、山越自身の論稿については、前掲『山越脩蔵選集』を参照。
- 4) 山本の伝記に小崎軍司『山本鼎 倉田白羊』上田小県資料刊行会、1967年、

同『夢多き先覚の画家——山本鼎評伝』信濃路，1979年がある。

- 5) 1919（大正8）年10月に神川村で配布されたこの趣意書は、長野大学図書館に所蔵されているが、山本鼎記念館（上田市）のHP（<http://museum.umic.ueda.nagano.jp/kanae/noubi/noubi.html>）にも全文公開されている。
- 6) 中村実『信州の木彫り 農民美術と共に』信濃毎日新聞社，2006年，231ページ。

小県哲学会から自由大学へ

大正デモクラシー期に上小地域で展開された三つの運動と、三人の青年との関わりを改めて整理すれば、以下ようになる。

まず、小県哲学会、自由画・農美運動、信濃黎明会の三つに同時に関わった青年は山越脩蔵ひとりだけである。彼は、信濃黎明会でも「会員懇談会ソノ他」の事業を行う修養部長として関わっているが、猪坂と同様の回想録をもし山越が残すとすれば、そのサブ・タイトルは、猪坂のそれとは異なり「小県哲学会と上田自由大学」になったと考えるのが自然であろう。

これに対して、金井正は、1916（大正5）年から翌年にかけて、山越が主体的に関わった哲学講習会の前身ともいべき信濃教育会小県支部主催の夏季哲学講演会に、西田幾多郎や田辺元を招くことに大いに尽力はしたが、哲学講習会では山越を側面から支援する役回りに徹し、軸足は自由画・農美運動に置いていた。猪坂は、1920（大正9）年10月に誕生した信濃黎明会だけに、その宣伝部長として深く関わっていたことは既述のとおりである。

要するに、自由大学で合流することになる三人の青年たちは、それぞれ微妙に重なり合いつつ、しかし各自の重心を三者三様の運動に置き、自由大学以前には同時に顔を合わせる機会は終ぞなかった。三人の出会い、猪坂の表現を借りれば、三つの運動の中では「甚だ地味な存在」であった哲学講習会の主催者で、三人のいわば要の位置にいた山越脩蔵の思想と行

動によって初めて可能になったのである。この間の事情を少し詳しく見ておきたい。

山越の行動は、当時売り出し中の文明批評家・土田杏村に講演依頼の書簡をしたためるという形で始められた。時に1920年4月初旬のことである。講演のテーマは、翌5月に予定されていた総選挙がらみの内容であった。当時はまだ普通選挙制は実現しておらず、神川青年団の一員として、「選挙権を有効に行使」することになる〈来るべき時代〉に備えて、「現在の政界や将来への展望と有権者の態度」に関する話を聴きたい、というのが依頼の中身であった¹⁾。

折り返し届いた杏村からの手紙は、残念ながら病気を理由とした断り状だった。しかし、文面には杏村の「想像以上の信頼に足る人柄」が滲み出ていた。そこで、山越は夏になって見舞い状を差し出す。返事は山越を大いに喜ばす内容だった。快方に向かっているので、五日間程度の講習会なら可能だと。ただし、ここで注意すべきは、当初山越が依頼したのは単発の時局講演会であったが、杏村の提案は五日連続の講習会であったという点である。

それはともかく、その後は、まさにとんとん拍子で話が進んでいった。9月下旬にその講習会が実現。「第一日は、杏村創意の文化主義論で、二日めから四日間は、西欧哲学の概観で『新カント派の哲学』の紹介を初心者にも分かりやすく、懇切に講義して聴講者に深い感銘を与えた²⁾。ちなみに、受講者は教員を中心に32名、受講料は一人三円、足を出さずに一切合財を賄うことができた。

好評に勢いを得て、主催団体を「小県哲学会」と命名し、五ヶ月後に二回目の講習会が開催される。翌21（大正10）年2月下旬のことであった。会場を神川村から上田市内に移したこともあって、前回は大幅に超える聴衆に恵まれ、初回同様五日間をかけてブレンターノやフッサールなどオーストリア学派の学説が詳しく講じられた。そして山越は、二度に亘る哲学講習会の成功を踏まえて、それをさらに拡充する新たな事業を暖めていっ

た。それがほぼ八ヶ月後に開講されることになる信濃自由大学であった。

- 1) 山越脩蔵「土田杏村の手紙と上田自由大学」『信州白樺』第29号, 1978年5月, 7ページ。
- 2) 同前, 9-12ページ。

山越を介した三人の出会い

好評を博した講習会に気を良くし自信も得た山越は、考えを次のように拡充・深化させていった。「田舎の農家に生れて、日常の農事に追れ、永い冬の長夜は火燵で茶話に終る人生を何とかしなければならぬ、……青年の難みをどれだけでも、良心的に気楽にするには、この様な講習会を順次組織的に行ふのは、無意義ではないと考へるようになった。……そこで哲学を軸としての文化科学の講座を、一ヶ年五六回宛開いて、それを長期に亘って関連させる組織をつくりたい¹⁾と。

杏村宛ての山越の手紙は残されていないため、正確な文面は記せないが、2月の講習会から二ヶ月経った4月下旬の山越宛て杏村の葉書には、「自由大学、青年議会、みんな面白い」という文字が見える。したがって、山越は、この頃には新たな組織の名称に「自由大学」を選んでいたことが伺える。さらに二ヶ月後の6月下旬の葉書には「二講座でも三講座でもいいというのは賛成です。……実際最初はその位のつもりでにおいて、直ぐに自由大学の名をつけておく方がよいと思ふ」という杏村の返事がしたためられている。つまり、「一ヶ年五六回宛」開くのは、多忙な講師の選考等で難があるが、小さく産んで大きく育てるつもりなら、そのプランには賛成で協力もしたいというのが杏村の立場だった。

二度目の講習会から四ヶ月。ここまでの経過は、山越にとって予想に違わぬペースだったのでなかろうか。しかし、これから先の四ヶ月で状況は急展開する。「二講座でも三講座でもいいというのは賛成です」という葉書の日付から四日後に書かれた杏村の長文の手紙が、その急展開の前触

れだった。そこには、「趣意書風のもののかいて見ました。別封を見て下さい」とあり、「本当の成案が出来たら一度印刷前に見せて下さい」としたためられていた。また、「八月（の）……廿二日頃から南佐久へ参ります。その節お目にかかれませう。いろいろ打ち合せませう」とあった。

つまり、二ヶ月足らず後に上田の近くに来るので、趣意書²⁾に盛り込まれた計画の詰め打ち合わせを行いたいという打診である。当然のことながら、受け取った山越は、「早速この書翰と趣意書の原稿をもって金井を訪ねて」善後策を協議している。その結果「中心になる事務所を定めたり、事務の中心人物を委嘱して置く必要がある」ことを確認。しかし、事務所と事務局長の腹案は、金井には想い浮かばなかった。そこで、山越が「いろいろ考えた末、〔前年10月設立の信濃黎明会で知己を得た〕猪坂直一君を考えて金井に〔名前を〕紹介〔照会〕すると本人を知らないという」。そこで、山越がまず猪坂に会って参加の意向を確かめ、合意が取れたところで三者の話し合いを行うという段取りが決まった。

山越・猪坂会談は、猪坂の経営する蚕糸雑誌社の事務所で「よく晴れた夏の日に」行われたことは判っているが、残念ながら、それが7月（8月ということはないと思う）の何日なのかははっきりしない。猪坂の同意によって三者会談も行われたが、その日時の特定もできない。しかし、8月中旬までのいずれかの日に、山越を介して三者が初めて顔を揃え、「猪坂宅を自由大学の事務所とし彼に専務理事を引き受けることを懇願し」了解を取り付けることになったのである³⁾。

ところで、『回想・枯れた二枝』の「まえがき」部分を引用しつつ、小川利夫は次のような判断を下している。『自由大学と信濃黎明会とは全然目的も性格も違う』ものであったが、『同じ時代に同じ土壌の上に生れ育ったこの二つの運動』は、それらをとおして大正デモクラシーの思想と運動を主体的に受けとめつつ生きた二人の青年——猪坂直一と山越脩蔵——にとって何よりもかけがえのない自己形成の場であった⁴⁾。

これまでの叙述からも明らかなように、以上のような判断をすんなりと

受け入れるわけにはいかない。二人の青年にとって自由大学が「何よりもかけがえのない自己形成の場」であり、猪坂にとっては信濃黎明会も同様であったことは小川の指摘のとおりである。しかし、山越にとっては、猪坂との対比でいえば、「目的も性格も」よく似た小県哲学会と自由大学との二つが「かけがえのない自己形成の場」であった。その点を、ここで改めて確認しておきたい。

- 1) 山越脩蔵「信濃自由大学（未定稿）」（長野大学編『上田自由大学とその周辺』郷土出版社，2006年所収の資料）参照。
- 2) この趣意書は、その後『改訂増補 農村問題の社会学的基礎』（第一書房，1932年），上木敏郎（解題）「土田杏村と自由大学運動」（『教育労働研究』第1号，1973年4月）および『自由大学運動と現代』（信州白樺，1983年）などに所収されている。
- 3) 前掲，山越「土田杏村の手紙と上田自由大学」19-25ページの諸所参照。また，本稿「はじめに」の注6）に掲載の柳沢昌一の一連の論稿も参照。
- 4) 小川利夫「大正デモクラシーと社会教育——自由大学運動とその周辺」碓井正久編『日本社会教育発達史』（講座 現代社会教育II）亜紀書房，1980年，129ページ。

土田杏村と自由大学の理念

三者会談に続いて，8月下旬には杏村を交えた四者会談が実現し，自由大学のメインキャストが揃い踏みすることになる。これ以降の経過については，既に多くの研究が蓄積されているので詳細はそれらの諸論稿に譲り¹⁾，ここでは，土田杏村の自由大学理念のエッセンスをまとめておこう。

自由大学に関する杏村の論稿は，本稿「はじめに」の注10）に挙げた論稿も含めて，決して少なくはない²⁾。しかし，自由大学運動が拡充するにつれて，その理念も完成度を高めていったことが認められるので，ここでは運動の全盛期に執筆された「自由大学に就て」（1923年）および「自由大学とは何か」（1924年）という二つの論稿を手掛かりにしたい³⁾。

教育の意義、それはまず「自己教育」にあるというのが杏村の大前提である。たとえ教育者から教育を受ける場合でも、それは「人格の他律」であってはならず、「人格の自律」をめざすものでなければならない⁴⁾。したがって、自己教育はまた、「自己決定的の教育」あるいは「自律の人格を自発的に造り上げる」教育と言い換えることができる⁵⁾。

このように、教育の意義は自己教育にあるが、これを「消極的」ないし「個人主義的」にばかり考えてはならない。教育とは何かを考える際にも、個人と社会との関係を考える必要がある。すなわち「個人は既に社会の中に生れ、其の要求の何れ一つでも社会的着色を帯びないものは無い」という認識を背後において考えなければならない。つまり、「社会的個人の性質を社会から取り離して個人的なるもの」と考えて立論してはならない。

以上を整理すれば、次のようになる。教育とは、それを個人的にみれば、自己教育すなわち「自己決定をなし得る完全なる能力」の養成のことである⁶⁾。しかし、同時に、教育を社会的にみれば、つまり個人を社会から切り離すのではなく「相互関係」の中で捉えると、「何人も他への教育者であると同時に、他に対しての被教育者なのである」「我々すべてが何等かの方面に於て教育者であり、何等かの方面に於て被教育者である⁷⁾」という関係が浮かび上がってくる。したがって「個人が相互に影響し合う」相互媒介的な社会関係からみれば、教育とは「社会的創造へ個人的に参画することの出来る人格⁸⁾」の涵養のことである。

ところで、杏村によれば、社会的創造への参画は、文化領域ばかりでなく労働の部面でも行われる。我々は「すべて一人の例外も無く生産的労働に従事す可きもの」として生を享けているからである。したがって、杏村によれば、教育は「労働しつゝ学ぶ」それでなければならない。学校教育が労働と切れたところで行われている現状は、むしろ変更すべきである。すなわち、学校教育は本来、労働とともに「終生的」に生涯行われるべきであり、現在の学校教育は、杏村が考える本来の学校教育への「準備教育」に過ぎない⁹⁾。

こうして、杏村は次のような自由大学の理念を導き出す。「自由大学とは、労働する社会人が、社会的創造へ協同して个性的に参画し得るために、終生的に、自学的に、学ぶことの出来る、社会的、自治的の社会教育設備〔施設〕だといふことが出来るのである」¹⁰⁾。

- 1) 信濃（上田）自由大学の経過に関しては、本稿「はじめに」の注2）～6）に挙げた諸論稿、注14）の「自由大学関係文献目録」を参照されたい。
- 2) 「哲人村としての信州神川」『改造』第3巻第8号（夏期臨時号）、1921年7月。「我国に於ける自由大学運動に就いて」『文化運動』1922年1月（『土田杏村全集』第14巻に再録）。「教育設備の改造」『文化』1922年9月（『教育の革命時代』に再録）。「自由大学運動の意義」『文化運動』第129号、1922年10月。「所謂自由の学府と労働大学」『解放』第5巻第7号、1923年7月（『教育の革命時代』に再録）。「震災に際しての思想戦」『報知新聞』1923年11月4日～7日。「自由大学の理念について」『文化』第6巻第3号、1924年1月。「自由大学へ」『北越新報』1924年7月10日、『新潟時事新報』7月11日。「自由大学協会の設立」『文化』第7巻第5号、1924年10月。「義務教育年限延長反対論」『報知新聞』9月29日～10月1日（『改訂増補 農村問題の社会学的基礎』および上木敏郎（解題）「土田杏村と自由大学運動」（1973年4月）に再録）。「自由大学へ」『自由大学雑誌』創刊号、1925年1月（『改訂増補 農村問題の社会学的基礎』、上木敏郎（解題）「土田杏村と自由大学運動」および『自由大学運動と現代』（1983年）に再録）。「自由大学の危機」『自由大学雑誌』第1巻第2号、1925年2月。「直ちに眞文化を建設する自由大学へ——『自由大学雑誌』の創刊」『アルス新聞』1925年3月5日（『文化』第8巻第4号、1925年4月に再録）。「労働学校の意義に就て」『文化』第8巻第4号、1925年4月。「自由大学の二途」『自由大学雑誌』第1巻第8号、1925年8月。「自由大学の季節が来た」『自由大学雑誌』第1巻第9号、1925年9月。「自律的人格への教育運動——自由大学の使命」『教育之日本』第4年第32号、1926年4月。「木崎村事件と将来の農村学校」『地方』第34巻第10号、1926年10月（「農村争議と将来の農村学校」と改題のうえ『農村問題の社会学的基礎』、『教育労働研究』および上木敏郎（解題）「土田杏村と自由大学運動」に再録）。「教育改革論」『報知新聞』1932年6月3日～6日（『土田杏村全

集』第15巻に再録)。

- 3) 「自由大学に就て」『信濃自由大学の趣旨及内容』1923年10月(『改訂増補 農村問題の社会学的基礎』、『土田杏村とその時代』第7・8合併号, 上木敏郎(解題)「土田杏村と自由大学運動」および『自由大学研究』第3号に再録)。「自由大学とは何か」『自由大学とは何か』(伊那自由大学パンフレット)1924年8月(『改訂増補 農村問題の社会学的基礎』, 上木敏郎(解題)「土田杏村と自由大学運動」および『自由大学研究』第4号に再録)。二論文ともに自由大学研究会編『自由大学運動と現代』信州白樺, 246-55ページにも所収されている。
- 4) 「自由大学に就て」『自由大学運動と現代』246-47ページ。
- 5) 「自由大学とは何か」『自由大学運動と現代』252, 254ページ。
- 6) 同前, 251ページ。
- 7) 「自由大学に就て」247, 249ページ。
- 8) 「自由大学とは何か」251ページ。
- 9) 「自由大学に就て」248ページ。
- 10) 「自由大学とは何か」252ページ。

教育と宣伝, 科学とイデオロギーの違い

終生的, 自学的, 社会的, 自治的と4つの形容詞がついているが, このうち自学的というのは自己教育ないし自己決定能力の養成という目標から出てくる特徴である。「信濃自由大学趣意書」でも「講座の開かれて居ない時間の聴講生の自学自習を尊重」することが強調されている¹⁾。また, 自治的という形容詞は, 教育内容やその方法, 講師の選択に至るまで「被教育者本位」²⁾の組織運営がめざされていることと関わっている。

ところで, 自治的という言葉には別の意味もある。自由大学が自治的な成人教育機関であるためには, その教育が「強権としての国家」から独立していなければならない。ところが, 現実の学校教育も成人教育も, そうはなっていないというのが杏村の立場である。そこで杏村は, 独自の「プロレットカルト」論³⁾を展開する。その要点を以下にまとめておきたい。

学校教育, 成人教育の現実には, 自由〔競争〕主義や個人主義の教育に覆われている。「偉いものになれ」「成功せよ」「生存競争に負けてはならぬ」

というのがそのスローガンである。社会から切り離された個人の成功を謳うことは、自由競争と「レッセ・フェール」を前提とした資本主義社会に調和的なイデオロギーである。たとえ教育の名の下にそれが行われていようと、それは教育ではなく宣伝に過ぎない⁴⁾。杏村によれば、それは「すべての人間を現代社会制度の中へ無難に織り込んで了うための」「ブルジョアカルト」である⁵⁾。

個人的な成功つまり立身出世主義を乗り越えるためには、現状の社会体制に組み込まれてしまうことを意識的に拒否することが必要である。しかも、そのためには、ブルジョアカルトに対抗しうる立場、すなわち「ブルジョア文化の理想となった個人主義を打破して、十分に人間性を発揮した、完全に自由な」「プロレットカルト」⁶⁾の立場に立たなければならない。現状肯定的なブルジョアカルトの殻を打ち破り、現状批判的なプロレットカルトの立場に立つことによって初めて、現状を超えたオルタナティブな社会体制を構想することも可能になる。

したがって、プロレットカルトの立場とは、宣伝を通じてではなく教育を通して獲得できる立場である。ブルジョアカルトが特定の資本主義的なイデオロギーに囚われていたことは既にみたとおりであるが、プロレットカルトは宣伝でなく教育である以上、特定のイデオロギーや政治から「独立」していなければならず、また「政治的強権から解放」されていなければならない⁷⁾。個人の〈思想の自由〉は保障されなければならないが、教育機関にとっては特定の〈政治からの独立〉、特定の〈強権からの解放〉、特定の〈思想からの自由〉が確保されていなければならない。以上が杏村の立場である。

ところが、プロレットカルト論の提唱者ポール夫妻は、それをマルクス主義的なプロレットカルト論に限定して論じているために、教育と宣伝とを混同する結果に陥っている。プロレットカルトの具体的な内容が、「単にマルクス唯物史観の解説だとか、露西亜革命の歴史だとか、或は経済学、政治学、農民運動史、労働法規だとかいふ様なもの許りであって、宗

教、文芸、哲学等の一般的教養を排斥するもの」であれば、それは特定のイデオロギーを外注する宣伝になってしまう。それでは、杏村によれば、ブルジョアカルトの裏返しに過ぎない。本来のプロレットカルトは、宣伝やイデオロギーの注入ではなく、「もっと深いところから人間性の睡夢を喚び醒すもの」であり、「現今社会の欠陥を厭悪し、其れが改造への心熱を醸育するに至る」ものでなければならない⁸⁾。

既に述べたように、杏村にとって教育とは「社会的創造へ個性的に参画することの出来る人格」の涵養であった。学問（科学）や「一般的教養」を通して現代社会の問題点や課題を見抜き、社会的創造に参画することによって社会「改造」に努力する「自律的人格」の養成、それが杏村の考える教育である。とすれば、その教育は、資本主義の支配的イデオロギーであるブルジョアカルトばかりでなく、マルクス主義的プロレットカルトをも含めた特定の思想から一定の距離をおき、それらを相対化した地点で「自己決定」しうる「自律的人格」の養成でなければならない。それが杏村の立場であった⁹⁾。

- 1) 自由大学研究会編『自由大学運動と現代』（信州白樺，1983年）243ページ。
- 2) 前掲「自由大学とは何か」254ページ。
- 3) 杏村のプロレットカルト論には以下のものがある。「階級自由教育の新潮流」『創造』第4巻第8号，1922年8月（『教育の革命時代』中文館書店，1924年に再録）。「プロレットカルト運動」『朝日新聞』1923年3月2日～3月6日。「教育と宣伝」『教育の日本』1923年4月～5月（『教育の革命時代』に再録）。「プロレタリア文化及びプロレットカルトの問題(1)(2)」『文化』第5巻第4号～第5号，1923年4月～5月（『教育の革命時代』に再録）。「修養技手の蜘蛛網」『解放』第5巻第6号，1923年6月（『教育の革命時代』に再録）。「プロレットカルト論」『中央公論』第38巻第7号（夏季増刊号），1923年6月（『教育の革命時代』および『教育学紀要』第1巻，1924年に再録）。「プロレットカルト私論」『教育之日本』第4年第30号，1926年1月。

- 4) 『自由教育論 下巻 教育の目的及教育者』内外出版, 1923年。『土田杏村全集』第6巻, 246ページ。
- 5) 「プロレットカルト論」1923年6月。『教育の革命時代』17ページ。
- 6) 「プロレタリア文化及びプロレットカルトの問題(1)(2)」1923年4月～5月。同前264ページ。
- 7) 同前318ページ。
- 8) 同前284-85ページ。
- 9) 横田憲治, 須山賢逸とともに信南(伊那)自由大学を興した平沢桂二は, 1926(大正15)年2月11日付の妹宛の手紙で次のように記している。「社会主義者(日本の多くの社会主義者と言ふ人々)が哲学も学ばず, 宗教を知らず, 芸術も味は、ずして唯彼等仲間のみ都合よく書かれたるこの方面の文献のみ読み聞きして上層建築が何だかだと言ふて哲学, 宗教, 芸術を批判し攻撃するのと同じく, 哲学者, 宗教家, 芸術家の多くの人々が自分の力場を固執し深く心を平静にして研究もせずしてマルキシズムや社会主義を嘲弄する。共に愚だ 共に悪だ(何も知らない国粹論者などは論外だ)」(福元多世「く回想」自由大学と二人のあに——義兄・横田憲治と兄・平沢桂二)『自由大学研究』第5号〔1978年5月〕60ページ。『自由大学運動と現代』〔1983年〕218ページ。国粹論者を論外としたうえで, マルキシズムと反マルキシズムとを, 社会主義者と反社会主義者とを一刀両断する平沢の立場は, いうまでもなく杏村の立場でもあった。

思想の自由と思想からの自由

自由大学は, したがって, 「団体として特に資本主義的でも無ければまた社会主義的でも無い。講師の主張には種々の特色があろう。其等の批判を自分で決定し得る精神能力と教養」とを涵養する教育機関だということになる¹⁾。しかし, だからといってそこに集う教育者も被教育者も思想的にニュートラルでなければならない, というのではない。個人レベルでいえば, 「講師の主張には種々の特色があろう」。教育者にとっても被教育者にとっても〈思想の自由〉が保障されていなければならない。しかし, 自由大学は, 政党の広報宣伝部でも宗教団体の布教宣伝部でもないのだから, 「団体として」は特定の政治思想や宗教思想を宣伝する機関ではなく, 自己決定力や批判精神を涵養する機関だということである。

この点は、杏村以外の講師たちにも了解されていた。1937（昭和12）年に「自由大学運動の経過とその意義」というタイトルの雑誌論文で、1920年代を回顧した高倉テルは、次のような興味深い事実を書き残している。「自由大学は、最後まで、直接宣伝煽動を目的とする講義を遂に行なわなかった。当時、無産運動とかなり密接な関係を持っていた波多野鼎君や、新明正道君や、また山宣でも、自由大学では、決して煽動的な講義をしなかった。それが、当時の左翼青年諸君から、不満に思われた点であろう。しかし、宣伝や煽動を目的とする講演会や演説会は、当時いくらかもあった。自由大学には、それらの演説会だけでは、満足しないで、もっと深い知識を求める人々が、集っていた」²⁾。

大正期の上田自由大学と、昭和期のそれや伊那自由大学との性格の違いを強調する研究もあるが、当事者の高倉は、自由大学が教育と宣伝との境界を曖昧にせず「最後まで」区別し続けたと記している。ところで、この指摘と関わらせて、猪坂が『回想・枯れた二枝』の中で触れている高倉の「左傾」問題について、ひとこと付け加えておきたい。

猪坂は、高倉が、大正15年以降農民運動家として過激な行動に出るようになり、とくに昭和4年「山本宣治氏が右翼兇漢によって暗殺された」事件を「契機」に「左傾」したのではないかとしている。そのうえで、猪坂は次のように指摘している。「自由大学はもとより如何なる主義の宣伝機関でもなく、イデオロギイに超越的な学習機関として生まれ且つ育ってきた。そこには大きい矛盾のある事が反省されるけれども、とにかく学習を超えた社会主義運動には批判的であったことは私だけではないと思う」³⁾と。この猪坂の指摘をどのように解すべきかが、ここでの課題である。「大きい矛盾」はどこにあり、猪坂は何を「反省」しているのだろうか。

まず、高倉個人の「左傾」じたいは、繰り返し指摘してきているように〈思想の自由〉の問題であって何ら問題はない。猪坂をはじめ自由大学のメンバーたちが「〔高倉が〕追々自由大学から遠ざかって行くように思われて悲しかった」という想いを持ったことは事実としても、「左傾」じた

いは何ら「批判」の対象にはならない。高倉が農民運動のオルガナイザーとして過激な社会主義運動の先頭に立ったとしても、それを傍からとやかく口を挟む資格はない。

問題は、「左傾」を「契機」に、自由大学の講義に「学習を超えた社会主義運動」が持ち込まれて「煽動的な講義」が行なわれたかどうかであろう。それが行われたのであれば「批判」の対象にもなろうが、後期の上田自由大学や伊那自由大学の研究蓄積に照らしても、そういう事実は一切浮かび上がってこない。猪坂は、恐らく、高倉が自由大学の講師の身でありながら「学習を超えた社会主義運動」に関わったことを「批判的」に見ていたのであろうが、彼の講義が「イデオロギイに超越的な」、つまり特定の〈思想から自由な〉講義であり、自由大学の枠組みを逸脱していないことも、十分に承知していたのではないかと思われる。

したがって、その批判的感情はお門違いであり、「大きい矛盾」がある。猪坂はその矛盾にも気づいていたので「反省」もしているわけである。『回想・枯れた二枝』の中でもとりわけ歯切れの悪い猪坂のこの文章は、猪坂自身のアンビヴァレントな立場をじつによく映し出しているように思われる。(しかも、この「反省」にはもう一つ別の「悩み」に通ずる意味あいも込められていた。つまり猪坂は「この敬慕措かぬ恩師〔高倉〕について行けない自分を反省しつつ悩んで〔も〕いた」のである。)

- 1) 「〔信南自由大学〕設立の趣旨」『信南自由大学趣旨書』1923年11月（『改訂増補 農村問題の社会学的基礎』（第一書房、1932年）、上木敏郎（解題）「土田杏村と自由大学運動」（1973年4月）および山野編前掲『自由大学運動史料』に再録）。引用は、『自由大学研究』第3号（1975年10月）45ページ。
- 2) 高倉「自由大学運動の経過とその意義——農村青年と社会教育」『教育』第5巻第9号（1937年9月）。『タカクラ・テル名作選』第5巻（文学論・人生論）理論社、1953年、305ページ。
- 3) 猪坂前掲書『回想・枯れた二枝』61ページ。

聴講生たちが語る自由大学(1)

繰り返しになるが、自由大学は、教育者、被教育者を問わず参加者たちの〈思想の自由〉を保障する一方、教育機関としては特定の〈思想からの自由〉を標榜することによって、教育と宣伝との混同を回避しようとしたのであった。この点は、高倉の指摘するように、特に下伊那では「当時の左翼青年諸君から、不満に思われた点」であったが¹⁾、その信南（伊那）自由大学の聴講生であった林源は、当時の状況を次のように指摘している。

「自由〔青年〕連盟とかは特定の政治目的とか、特定の主義で活動したために弾圧をうけたのですが、自由大学の方は一般的な教養をもって、だから佐々木さんのような人の人間形成ができたわけです。そしてそういう特殊な立場でなかったから、弾圧もうけずにだんだんと進歩的な教養というものが身体についてきて、それがその後に村長になるとか、養蚕組合の組合長になるとかで村にかえっているのですね、世の中に通用する立場について、そのことは、そういう人達が村の指導者になったから、下伊那の村の文化的生活というものが形成されたというよりも考えられたのですね、そういう意味で私は自由大学の教養はほんのわずか五・六年ですけれども、こんなに下伊那の生活に影響を与えたものはない、自由大学で勉強をしたのはごく少数の一握りの人達だけれどもそんな感じがします」²⁾。

自由大学研究に先鞭をつけた宮坂広作は、「自由大学運動の評価」に当たっては「そこに学んだ人びとの認識をどう発展させ、どのような人間像をうみだしたかという点が決定的」といい、「自由大学の学習にあきたりず、その限界をのりこえようとした人びとが、自由大学のうんだ最良の子だった」と指摘している³⁾。宮坂自身は、資料的制約もあって、自由大学の「限界をのりこえようとした人びと」の「人間像」を提示することはできなかったが、その後、自由大学研究会の地道な聞き取り調査や関係者の座談会によって、「〔自由大学〕に学んだ人びと」の「人間像」は、かなりの程度まで明らかになっている⁴⁾。

聴講生の林は、上記の引用の中で、宮坂のいわゆる「自由大学のうんだ最良の子」が、宮坂の考えとは異なり「〔自由大学〕に学んだ人びと」、「ごく少数の一握りの人達」の中から確実に輩出したことを語っている。しかも、「最良の子」の輩出が可能だったのは、マルクス主義的な青年連盟とは異なり、自由大学〔の聴講生〕が「一般的な教養」ないし「進歩的な教養」を通じて「人間形成」を行い、その後「世の中に通用する立場」に立つことによって「村の文化的生活」に影響力をもらったからだ指摘している。

自由大学運動の評価を巡っては、宮坂の教養主義的限界説を嚆矢として、理論と実践の分離、自己変革と社会変革との（ないしは自己成長と地域変革との）不統一に対する批判と反批判が繰り返されてきた⁵⁾。しかし、林の指摘は、「自由大学の教養」が聴講生の「人間形成」に影響を与えただけでなく、地域の「文化的生活」にも影響を与えたことを踏まえて、「自由大学の教養」を積極的に評価する指摘である。従来の研究は、自由大学の講義が「地域変革」のための「実践的な」内容を含んでいたかどうかに主としてその関心を集中してきたが、林の指摘は、講義後にどのような人間として「村にかえっている」か、宮坂のいわゆる「どのような人間像をうみだしたか」という視点からの発言であって、無視ないし軽視することは許されない。

- 1) 信南自由大学の創設者の一人須山賢逸は、その最初の（1924年1月の）講師に予定されていた山本宣治に宛てた1923年11月24日付の書簡の中で次のように指摘していた。「私達の自由大学は、……他の同様な大学とは、其のモットーに於て大いに違ってゐる事と信じてゐます。それは、私達のはハッキリした方向を支持してゐると云ふ点です。即ち現代の教育が凡て一部階級の自家擁護の具となりつつあり、それがために学問の独立すらも無視されつつある事に反対して立ったプロレットカルト的内容を持つ点です。信州上田にも、丹波あたりにも、形態の同じものはありますが、全然この点に於て違ふ様に思はれます」（『山本宣治全集』第7巻、汐文社、

1979年、191ページ)。また、LYL 検挙事件 (1924年 3月17日) 以降、社会主義運動の機関誌からも、「主旨がプロカルトであると主張した限り、吾等の精神は資本主義的でも無く社会主義的でも無いとは何う云う心底か測られぬ。検挙事件当時に急しくパンフレットを出して、白々しい返りを打った様な行為はたとえ他人でも青年同志なら浅まし過ぎる」(『政治と青年』第15号、1925年 2月10日) との冷やかな批判が浴びせられた。しかし、杏村は、既に述べたように、個人的な〈思想の自由〉と団体としての〈思想からの自由〉とを区別し、教育と宣伝とを区別する立場から、自由大学は、「もっと深いところから人間性の睡夢を喚び醒す」ためには、既存のイデオロギー(「ハッキリした方向」)を安易に「支持」することに満足してはならないと考えていたのである。

- 2) 自由大学研究会編『伊那自由大学の記録』〔自由大学研究別冊 1〕26ページ。同編『自由大学運動と現代』信州白樺、185ページ。
- 3) 宮坂広作『近代日本社会教育史の研究』法政大学出版局、1968年、496ページ。同様の指摘は、その後も佐々木敏二「長野県における社会運動と自由大学運動」(『自由大学研究』第7号、1982年10月)によって繰り返されている。「自由大学に集まってきた生徒たちがどういうふうな社会構成であり、またその人たちがその後地域の運動にどういう影響を与えたのかという面での研究は、あまりなされていないんじゃないか」(3ページ)。
- 4) それを要領よく整理した論稿に、前掲〔「はじめに」注12〕山口和宏「自由大学運動における『教養主義』再考」がある。参照されたい。
- 5) 宮坂の教養主義的限界説(前掲書460ページおよび宮坂稿「天皇制教育体制の動揺と再編」宮原誠一編『教育史』東洋経済新報社、1963年、255ページ)に対して佐藤忠男、黒沢惟昭による反論がある。佐藤忠男「土田杏村と自由大学」『朝日新聞』1973年 7月30日～8月13日(朝日新聞社編『思想史を歩く』下巻、朝日選書6、1974年に再録)。黒沢惟昭「自由大学研究の現段階」『月刊社会教育』1973年10月(『国家・市民社会と教育の位相』御茶の水書房、2000年に再録)。同「自由大学研究についての覚書——教養概念をめぐる」『一橋論叢』第71巻第5号、1974年。また、宮坂説は前期上田自由大学には妥当するが、後期上田自由大学や伊那自由大学には妥当しないという山野晴雄説を念頭において、上條宏之は以下の指摘をしている。「〔後期の〕地域変革学習は治安維持法成立をへた昭和恐慌期特有の非合法性を余儀なくされて、その影響力をきわめてそがれてしまっていることを指摘しないわけにはいかない。……タカクラテルとかれの影響下の青年たちは、農民運動にとりくみ、運動理論の学習の場としての

意味あいを自由大学にもりこもうとしたため、再建というにはあまりにも短命に、上田自由大学を終わらせてしまう。そこには弾圧のがわに責任がある、といってしまう問題がはらまれている」（『大正デモクラシーと上田自由大学』『伝統と現代』第56号、1979年1月、91-92ページ）。

聴講生たちが語る自由大学(2)

とはいえ、林の指摘からは具体的な「人間像」は浮かび上がってこない。しかし、文中には「佐々木さん」という具体名が挙がっている。そこで、この人物、つまり第二次世界大戦期に大下条村の村長を経験した佐々木忠綱の、村長時代の回顧談に耳を傾けてみよう。

「その当時役場吏員が出征をする時に私が役場の中で歓送の宴をはりまして、そのときに『おまえ絶対に死ぬなよ、どんなにしても生きて帰ってこいよ』と私が言いましたら、一人の書記が、『村長、ちょっと失言ではないか、そういうことを言うべきではないんじゃないか』と叱られたことがありましたが、みなこれ自由大学のお陰であったと思います。私はその後ずっと人生を今日までまいりましたが、その根本になる精神は……自由大学の感化であります……本の選択というような力を、ぜんぶ自由大学の時に得たのではないかと思う次第であります。

長野県は満州開拓を非常に強力に進めましたが、私は絶対にかんと、県で進めるのはいいけれど、満州開拓を村で進めるのはいかんと。ある時は壮年団が全部寄ってきて、『村長なんだ、分村すべきじゃないか、各村が全て分村しているのに、なぜ分村せんのか』と詰め寄られたことがありましたが、他の村長と満州を視察して、どうしても満州移民を出すべきではないと考えまして、分村を拒否しました。いま考えて、もしあの時に分村しておったならば、大勢の犠牲者を出し、自分も生きておれなかったのではないかと思うぐらいですが、とにかく自由大学の当時の感激というのが本日まで、間断することなく続いて生きているわけです¹⁾」。

もう一つ、村長時代に端を発する回顧談がある。「何とか中等学校を村

に作りたいたいと思ひまして、当時運動を少ししたり近村の村長連、村の学務員などと一緒に、県内の視察をしたりしましたが、その時は結局成立しませんでした。幾分我々の考えが反映して終戦後阿南高校ができましたが、とにかくこれらも自由大学のおかげだと思っています²⁾。

このうち、村役場職員の出征を巡るエピソードは、戦時中同じく村長であった金井正を追憶した堀込義雄の次のような文章とダブらせてみると興味深い。

「学究的な金井さんはすべてに理論的で、感傷的な涙を冷笑していた。しかし、人間金井さんには溢れるような涙があった。あの戦争当時幾多の出征兵士を送ったのであるが、その都度村長が壮行の挨拶をするのが役目であったが、金井村長にはそれは何よりも苦痛のようであった。何時でもその場になると胸が一杯になって言葉が詰ってしまう。如何に形式的な激励のためでも応召者の命のことや、銃後の家の生活苦がわかりきっているのに、後のことは心配するな、とはどうしても言えなかったというのは金井さんの述懐である³⁾。

戦時中に敢えて「生きて帰ってこいよ」という禁句を発する村長も、心にもない儀礼的な挨拶ができず言葉に詰ってしまう村長も、戦争に対するメンタリティという点では共通点があろう。そして、時代状況に対するスタンスの共有は、佐々木の言うように、二人が深く関わった自由大学と無関係ではないかも知れない。しかし、それだけでは自由大学が生み出した人間像があぶり出されたとはいえないであろう。

だが、それに満州開拓問題や、中等学校設立問題、さらに国民健康保険組合設立問題や阿南病院設立問題なども組み合わせてみると⁴⁾、自由大学が佐々木忠綱という人物に与えた有形無形の影響が浮かび上がってくる。講義自体に「地域変革」のための「実践的な」内容が盛り込まれていたかどうかはともかく、地域にとってその時々でどのような実践的な判断をすることが最も望ましいか、問わず語りにその身の処し方に対する示唆を与えてくれたのが自由大学だったのではあるまいかというわけである。

それが、一つには時代精神にあらがい、村民の反対を押し切っても、自らの視察を根拠に満州への分村移民を拒否した判断に確実に現れている。また一つには、村の教育や福祉や医療の質を高めるための「文化的生活」向上への的確な判断に現れている。阿南高校も阿南病院も、その設立は在任中には達成されなかったが、佐々木の村長時代の地域改造意識に基づく実践がなければ、戦後の芽吹きはなかったかもっと遅れていたはずである。自由大学の理念ないし教育目標であった「自己決定」力や「社会的創造への参画」力それ自体が、佐々木自身が指摘しているように、彼を鍛え地域の「文化的生活」改善へと向かわせた「精神」であったと見做すことができよう。

- 1) 前掲『自由大学運動と現代』28ページ。
- 2) 前掲『伊那自由大学の記録』24ページ。『自由大学運動と現代』183ページ。
- 3) 堀込義雄「金井正さん」『上田市立図書館報』第14号、1964年6月、2-3ページ。
- 4) 以上四つの問題について詳しくは前掲〔「はじめに」注5〕米山光儀「自由大学の影響に関する一考察——長野県下伊那郡天下条村の場合」参照。また満州開拓問題については、大日方悦夫『『満州』分村移民を拒否した村長』『歴史地理教育』第508号、1993年10月、64-71ページも参照。

自由大学運動の歴史的意義とその限界

もちろん、佐々木の回顧談は、自由大学の講義内容に分け入って具体的な影響や「感化」を語るものにはなっていない。また、自由大学だけが、その後の彼の思想と行動を生み出したと語っているわけでもない。あくまでも、自由大学という教育機関に参加し、そこをいわば通過することによって、さまざまな影響や「感化」を、講師や聴講生から受けたと言っているに過ぎない。

佐々木が「本の選択というような力を、ぜんぶ自由大学の時に得た」と

語っているのは、その典型的な例と言ってよい。昭和恐慌期に再建された後期上田自由大学の受講生の一人は、「自由大学へ行ったことは、私にとって一生を左右することになりました。私は生きて行く世の中で何が正しいか勉強して知る必要を覚えたのです。……〔高倉〕先生からすすめられた本は何度も読み返してわかるまで手間どったものです。複雑な世の中の見方その立場をわからせてもらったのです。自分の生き方も自分なりにわかりました」と語っているが¹⁾、「何が正しいか」「世の中の見方」「自分の生き方」を「自己決定」する際に、読書の傾向つまり「本の選択」基準は、きわめて重要な条件をなすと考えられるからである。

じっさい、有形無形の「感化」を受ける機会には、決して少なくはなかった。猪坂直一は、土田杏村の「哲学概論」の講義を次のように振り返っている。「哲学を講じながら、教育、文芸、社会問題と、いろいろな方面に批評を加へて行かれるのを、僕等は頗る愉快に聴いたものである」²⁾。講義の中には、狭い専門で完結するものばかりでなく周辺領域に関連づけながら、いわば「考えるヒント」の詰まった講義も含まれていたのである。

しかし、「感化」を受ける機会には、講義中だけだったわけではない。例えば、信濃自由大学の第一期最終回に講師をつとめた大脇義一は、次のような回想を書き残している。「講義が終ってから活発な質問が起り、普通の大学の講義では見られない熱心な研究意欲に少なからず驚いた。二、三の聴講生は夜、宿舎にまで訪ねて来て討論された」³⁾。つまり、自ら進んで真理に近づきたい、あるいは積極的に「考えるヒント」を得たいと考える受講生にとって、扉はさまざまな形で開かれていたのである。

したがって、自由大学の歴史的意義は、これまでのところから充分明らかであろう。自由大学は、個人主義的な立身出世主義とも実利主義とも無縁な、社会性を背後にもった自己教育機関であった。教育機関である以上、さまざまな学説や思想や社会体制を紹介することはあっても、特定の学説や思想を宣伝する機関ではなく、それらを批判的に吟味して自己判断を下しうる「自律的人格」を養成する機関であった。そうであればこそ、

佐々木忠綱のような、いわば〈地域を変えうる教養人〉とも呼びうるような人物の輩出も可能だったのであり、そこにこそ計り知れない社会的意義があった。

だが、こういう評価に対しては、既に以下のような批判が行なわれている。自由大学は、「いかなる主義をも排斥し、拒否することで、かえって真実の上に立つ主義の価値をみいだしえずに終る危険を」孕んでいた、という批判がそれである⁴⁾。その誤解を解いておきたい。

まず、自由大学はいかなる学説や主義（思想）をも「排斥」したり「拒否」したりはしなかった。それらを俎上にのせ、それらの真偽を各自が吟味するに任せたのである⁵⁾。その際、「真実の上に立つ主義」や学説が、所与のものとして存在するという立場を採らなかった。解りやすくいえば、例えばマルクス主義は「真実の上に立つ主義」であるとか、『資本論』に書いてあることや「唯物史観の公式」は全て真実なので、一字一句変えてはならないといった立場を採らなかった。自由大学は、各自の批判的な吟味、真理を追求するプロセスが大事だと考えたのであり、真偽を決めるのは自由大学という組織ではなく、受講者個人であるという立場を貫いたのである。

以上は自由大学の「限界」どころか、むしろクリティカル・シンキングを養成する自由大学の優れた点である。しかし、自由大学に限界がないというのではない。既に触れたように、「信濃自由大学趣意書」には、「自学自習」と聴講の資格を問わず「何人にも公開」という原則が謳われていた。また、自由大学の理念には「自学的」と並んで「自治的」という特徴も掲げられていた。これらの原則ないし特徴は、これまで肯定的に評価されてきた傾向にあるが、自由大学の実態に照らして果たして肯定的に評価できるであろうか。

土田杏村は、自由大学を取り巻く新進気鋭の講師陣に触れ、「自由大学は恵まれた学校だ。先ず其の講師の顔触れを見るがよい」と自賛しているが⁶⁾、講師が日常的に「自学自習」の支援ができないような状態を「恵ま

れた」状態と見なすことはできるであろうか。支援体制が全く考慮されなかったと言っているのではないが、高倉輝を除いて現地居住の講師はなく、高等教育にとっても大切な日常的な教育支援が、講師の限られた滞在期間中に限定され、手薄であったことは否定できないであろう。

また、自由大学は、ほとんどが中等教育以下の教育しか受けていない農村青年にたいして、受講資格を問わずに大学教育に匹敵する質の高い講義を提供したのであったが、高等教育への準備教育（導入教育）が周到に用意されていたかと言えば、そうではなかった。講義が難しいと聴講生が感じて、「講義を理解し得る各自の自信に信頼して」開講されているという建前では、自信を喪失して次の受講を断念するか、初めから諦めるしかなかった。神川村の青年会会長や時報『神川』の編集に関わった望月与十の眼には、上田自由大学は次のように映っていた。「大学の名に迷わされ、己より数段上級の研學キ関と思ひ込んで居り、一寸は手の届かぬ在野の大学と信じてゐた。……並人にも手の届く勉學キかんとは思ひもよらなかつた」⁷⁾。

自由大学に対して、それは「何人にも公開」された民衆の教育機関であったと手放しで評価するのは、受講料が決して安くはなかった点に加えて、望月のような中等教育を終えて村に留まった農村青年の回想があるだけに、躊躇せざるをえない。それは単に望月の誤解であるとか、教育機関としての広報不足といって済ませない問題があるからである。自学自習への支援体制の不備と並んで、導入教育への配慮が欠如していたことが絡んでいるからでもあるが、そればかりではない。「被教育者本位」の自治への配慮も不徹底であったこと、問題はその点とも絡んでいるのである。

既に触れたように、自由大学の理念には、教育内容やその方法、講師の選択に至るまで「被教育者本位」の組織運営が謳われていた。しかし、教育内容やその方法に関しては、各講座担当の講師の裁量に任されていたし、講師の選択は土田杏村と高倉輝にほとんど全面的に依存していた、というのがその実態であった。図書館や講師の宿泊施設を作って、自学自習

の支援強化を図りたいとか、ゼミナール形式の授業やディベートを採り入れた授業方法が話題に上ったことはあったが、それも実現はされなかった。

もちろん、これらのマイナス評価によって、既に述べた自由大学の意義が薄れるということは決してないが、いわばスローガンとして掲げられた理念と実態とが乖離していた点を無視ないし軽視することは、自由大学運動の歴史的意義を正確に把握する途ではないという点を確認して本稿を閉じることにしたい。

- 1) 深町広子「自由大学運動60周年を記念して」『自由大学運動60周年記念誌』(1981年11月) 12ページ。
- 2) 猪坂直一「上田自由大学の回顧(6)」『自由大学雑誌』第1巻第7号, 1925年7月, 19ページ。
- 3) 大脇義一「信州自由大学の思出」上木敏郎編『土田杏村とその時代』第7・8合併号(1968年3月), 13ページ。合冊版, 192ページ。
- 4) 宮坂前掲書『近代日本社会教育史の研究』507ページ。
- 5) 土田杏村は, 1925(大正14)年1月24日付の横田憲治宛の手紙で, 以下のよう書いている。「社会主義者が自由大学の会員となり, 其等の会員の発意によって社会主義の講義を開くこと, また大いに歓迎するところです。……何にせよ教育を他働的のものと考へられちゃあたまりません。あらゆる多元を包容しつゝ、今後は発達させて下さい。どんな要素が含まっても自由大学そのもの、破れっこはありません」(山野編前掲書『自由大学運動史料』37ページ)。みられるように, 杏村は「社会主義の講義」を「排斥」したり「拒否」したりするどころかむしろ「歓迎」している。他方, 杏村が「排斥」したり「拒否」しているのは, 「教育を他働的のものと考へ」る態度である。講師の説く「社会主義」や「マルクス主義」や「唯物史観」の解説を鵜呑みにする態度や, 『資本論』の解釈や解説を無批判に受け止めてしまう態度, それは自己教育とは無縁だというのである。講義によっては, 「俗流」に流れる可能性もあり, 解釈が分かれる論点を扱う可能性もある。杏村にとって大事なことは, ここでも被教育者が自律的に判断できる力を養えるような教育のあり方ということになる。
- 6) 土田杏村「自由大学へ」『自由大学雑誌』第1巻第1号, 1925年1月, 3

ページ。

- 7) 前掲〔「はじめに」注13〕渡辺典子「(聞き取り) 長野県小県郡神川村の青年団活動——望月与十氏に聴く」15-6 ページ。

The Historical Meaning and Limitation of Jiyudaigaku-undo (Free University Movement)

Shinichi NAGASHIMA

《Abstract》

Jiyudaigaku-undo (Free Universities Movement) was the 1920's self-education movement in Nagano, Niigata, Fukushima and Gunma Prefecture. The first lecture was November 1, 1921 in Ueda City, Nagano Prefecture. The peak of this movement was in 1924 and 1925, during this period the Association of Jiyudaigaku was founded and the monthly magazine was published.

The spirit of Jiyudaigaku-undo was self-education and self-study. Through such education Jiyudaigaku students were critically thinking persons, and after several years some graduates influenced community life and culture. For example, Tadatuna Sasaki was elected village chief during World War II, but he rejected colonial policy for Manchuria because of his anti-imperialist sentiments. Also he contributed to the improvement of community life by constructing a high school and a hospital after the War.

The educational aim of Jiyudaigaku was to nurture critical thinking and self-determination, but it had limitations. Even now the principle of being open to everyone is considered a merit, but it was only a slogan because of its expensive tuition. Kyoson Tsuchida, one of the founders of Jiyudaigaku, said that it was the blessed university because of its excellent professors, but frequently they couldn't support the educational needs of their students because of their short stays in the villages.

Jiyudaigaku aimed for autonomous and student-centered education, but each lecturer selected his own educational contents and teaching method. The choice of lecturers also depended upon Kyoson Tsuchida

and Teru Takakura. So there was a gap between the ideal and the reality. Nevertheless Jiyudaigaku-undo which aimed to cultivate self-determination and community participation was an extremely worthy historical educational movement.